太宰府人物志

資料室だより⑬

高橋紹運の辞世の句

高橋紹運は戦国時代の武将で、太宰府所在の宝満・岩屋城の城督として、大友氏に最期まで従い、天正14年（1586）7月、島津氏による攻撃を受けて壮絶な死を遂げました（岩屋城合戦）。主君に忠義を尽くして死んだこの紹運の行動は、江戸時代に成立した軍記において大いに顕彰されました。

軍記とは戦争の実録を主題としたり、戦記を通じて武将の伝記を記述したりした叙事文学です。その記述は貴重な歴史情報を伝えてくれる一方、文学作品であるが故の潤色・誇張を含みます。例えば、岩屋城合戦を主題とし、慶安4年（1651）あるいは同5年の成立とされる『高橋記』という軍記がありますが、これには、紹運は島津氏側からの再三の降伏勧告を断固拒否したと記されています。ところが、より史料的価値の高い、島津氏の重臣上井覚兼の日記では、紹運は城を明け渡さないことを条件に自ら降伏することで和睦を請うたが、島津氏側に拒否された、とあるのです。

ところで、紹運の辞世の句とされるものがこれらの軍記等の資料に記されています。実はこれが史料によって異なります。

A「流れての末の世遠く埋れぬ名を
　や岩屋の苔の下水」

B「骸をば岩屋の苔に埋てぞ雲井の
　空に名を留むべき」

Aの歌は岩国藩で元禄8年（1695）に編さんされた「陰徳太平記」という軍記に見える他、宝暦13年（1763）の年紀を持つ「岩屋古戦場一覧之記」という軍記に見えます。Bの歌は岩屋城合戦を主題とした軍記の中では比較的古い、元和頃（1615～24）の成立とされる「九州治乱記」や、前述の「高橋記」の他、薩摩藩で編さんされた藩史「旧記雑録後編」に所収の「旧伝集」や佐賀藩で編さんされた軍記「北肥戦誌」、史書「歴代鎮西志」などに見えます。

軍記等の史料の中ではBの歌を採ったものが多いのですが、明治40年（1907）に郷土史家江島茂逸が著述した「岩屋城史談」がAの歌を採用したためか、現在ではAの方がよく知られているようで、この歌碑が岩屋城跡に建てられています。

市史資料室　朱雀　信城